

子どもたちのこと

## 十、ふたごの姉妹

大橋 利恵子

「ふたご」っておもしろいな、久しぶりに担任した一卵双生児を見ながらつくづくと思  
っている。顔も体格もそっくりで、同じ時に同じ環境に生まれ、同じ様に育ってきている  
のに、何故か性格は少しずつ違ってくる。少どころか、正反対の性格が見られることす  
らしばしばである。二人一組になってしまっているのかなと思ってみたり、周りの人が、  
同じでは困ると思っにかかわるからかなと思ってみたり……単純に考えたら、全く同じ人  
間になりそうな気がしてしかたがないのに。

今年四月に入園したY子とL子も、顔はよく似ていて、一人ずつだとどちらだかわから  
ないことがある。身長は妹のY子の方が1cmぐらい大きい。これもならべて比べてみない

とわからない。持ち物も着る物も食べ物も、すべて一緒に育ってきていて、何をすることも一緒なことが多い。入園当初は一緒によく泣いていた。三日もすると、L子が泣きやみ、Y子も自然と泣かなくなった。一ヶ月ぐらひは特に差を感じることもなく二人一緒という感覚で見えていたが、それぞれ動きが活発になって、一人ずつでも遊べるようになってくると、いろいろ違いが見えてきた。

まず先に遊び出したり、周囲の子と友だちになったりするのはL子の方が先である。L子の遊びについていくことが多いY子である。自分の身のまわりのことをさっさとできるのはY子である。L子はY子に促されたり、手伝ってもらったりすることがよくある。物事にあまりこだわらないのはL子で、わりに神経質なのはY子の方である。先日、集金日に(当園ではまだ子どもが毎月現金を持ってきているので)Y子のかばんから現金の入った袋と、領収の印を押すノートをさっさと持ってきた。ところがL子はノートだけ机の上にボンと置いてお金の袋はどこにあるかわからないと言う。「たいへん、さがして!」と言うと、一生懸命さがすのは何とY子の方で、本人のL子はちよんとすわっているばかり、あらあらと思ったわけである。

プールに入り始めた時もおもしろかった。最初は二人ともこわがって全然入れなかった。手をとり、体をかかえ、水の中に入れていくと、徐々に慣れていって、すぐに自分でワニ歩きをはじめたのはL子で、どうしても泣いていたのはY子だった。でもL子が楽しそうにやるのを見て、Y子もだんだん恐くないのだなと思えてきたのか、七月末ごろに

は、入れるようになってきた。(しかし、この後、夏休みにL子はポットがひっくりかえり、こわい経験をし、九月には立場は反対になっていて、Y子の方がおよびていた)。

二人一組でちょうどバランスがとれているから、二人に違いがあっても困りはしない。かえって、少々違っている方が見えて安心なのは事実なのだが、どうして違ふのだろう。母親に言わせれば、小さい時から違っていたそうである。母親が「あら、違ふな」と思った時から対応の仕方に差が出てきたのかもしれない。差がはっきりしてからは、両親、兄弟等周囲の人達との人間関係が違ってくるだろうから、L子なりとかY子なりとかいったものが生まれてきて当然なのだろう。でも、それでは最初に違ふと思わせたのは何だったのか、何か生まれつきに感覚の差のような微妙な違いがあったのだろうか。

こうして考えていくと、教師が、その子に対して持っているイメージというのは、その子に接していく時に、かなり影響していくのだということに気づかされる。それが本当に持って生まれたその子らしさなのか、周囲が押しつけているイメージなのか、よく見きわめなくてはならない。そして、さらに、イメージを固定して、決めつけてはいけないし、また、その子の持っているその子らしさを無視してこちらの好みを押しつけてもならないなど、ふたごの姉妹を見ながら反省した次第である。

(岐阜北幼稚園)